

2024 年高知県橋梁会九州見学会

高知県橋梁会第 4 代会長 右城 猛

1. はじめに

元・高知工業高等学校の教諭であり、第一測量設計コンサルタント(現、第一コンサルタンツ)の社長であった石川貴泉先生が 1977(昭和 52)年に、「県内でも橋の設計ができるように皆で勉強しようではないか」と教え子たちに呼びかけてできたのが高知県橋梁会である。

今年は創立 47 周年を迎えた。設立時の法人会員は県内のみの 16 社であった。現在の会員は四国内だけでなく東京、北海道など全国にわたっており、設立時の 4 倍の 64 社になっている。

現場見学会は 1982(昭和 57)年から始めた。周年記念行事がある年を除けばほぼ毎年開催してきたが、2020(令和 2)年からコロナウイルス感染症拡大のため中止していた。今年、5 年ぶりに 35 回目の現場見学会を開催した。1 泊 2 日で九州へ行き唐戸市場、関門橋、若戸大橋、太宰府天満宮を見学し、柳川城お堀遊覧、明太子手作りを体験してきた。

九州は 2005(平成 17)年の大分県以来である。参加会員は 16 名であった。

2. 1 日目 10 月 18 日(金)

(1) 関門橋



高知龍馬空港 10 時 25 分発の JAL3582 便で福岡空港に行く。



門司の「めかり PA」でトイレ休憩。



下関側から見た関門橋。関門海峡に向けて砲台が並んでいる。1863(文久 3)年に長州藩がイギリス・フランス・オランダ・アメリカの列強 4 国と戦った馬関戦争(下関戦争)のときの砲台。



下関市と北九州市門司区の間に関門海峡を跨ぐ全長 1068m、最大支間 712m の吊橋。1973 (昭和 48) 年 11 月 14 日に開通している。



唐戸市場で昼食。到着したのが13時30分。市場が閉まるのは15時。にぎり寿司は1割引であった。半額で買った会員もいた。



下関名物「ふくの袋競り」の銅像。下関では「フグ」を「ふく」と呼ぶ。



唐戸市場の前の緑地でビールを飲みながら「にぎり寿司」を食べる。魚が新鮮なので美味しい。



関門海峡に架かる関門橋の下を貨物船が運航。絵になる。



秋晴れの最高の観光日和。関門海峡、関門は氏をバックに西川準二理事、横田譲二理事、友田一志理事と記念撮影。



壇ノ浦PAで、テクノブリッジNKE(株)の吹田沙奈恵さん、グエン・ド・ドゥックチェンさん(ベトナム出身)。二人とも橋梁の設計に携わっている。吹田さんは入社3年目、ドゥックチェンさんは4年目若手のホープ。

(2) 若戸大橋



若戸大橋の若松側アンカレッジの内部に若戸大橋展示室（アビュレド・ブリジウム）が2013(平成25)年4月に開設されている。



展示室には、2011(平成23)年からの大規模補修工事で取り替えた橋梁部材（50年間使用されたもの）や、建設当時の設計図や写真等が展示されていた。北九州市戸畑区役所まちづくり整備課若戸大橋管理係長の國武亮氏が展示物の説明をしてくれた。

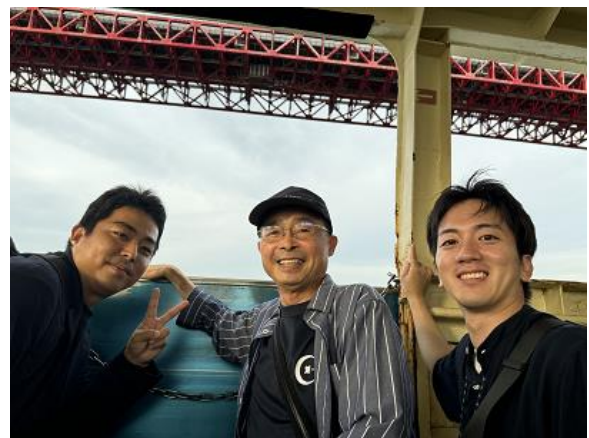
展示室の壁には「若戸橋工事事務所職員名」を刻んだ銅板が掲示されていた。その中に吉田巖の名前があった。吉田は、戦後の日本の長大橋梁の建設に大きな貢献をされた土木技術者である。



若戸大橋をバックに参加者16人と戸畑区役所まちづくり整備課若戸大橋管理係の二人も交えて記念撮影。



洞海湾を跨ぎ戸畑区と若松区を結んだ若戸大橋。全長627m、最大支間長367mのわが国最初の本格的長大吊橋である。



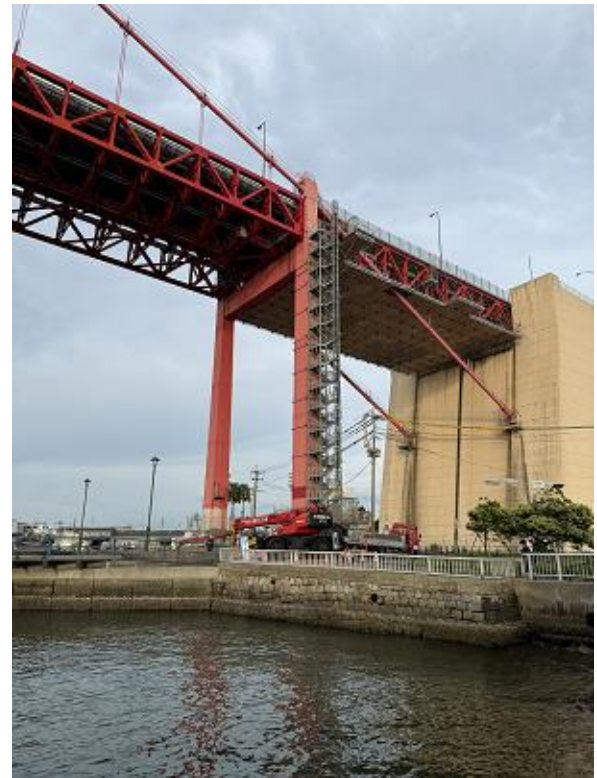
若戸渡船で洞海湾を渡る。社員の片山直道君と乾隼輔君。



吊橋の支間を短くするため水中に橋脚を設置。基礎はニューマチックケーソン。ケーソン内部の土砂は、土方がスコップで掘削。現在では考えられないような過酷な作業である。



戸畑に着いた渡し船「若戸渡船」。渡船料は100円。1930(昭和5)年に若戸渡船の転覆事故で乗客73名が死亡した。転覆事故を契機に福岡県議会が洞海湾トンネル計画を決議し、内務省が施行を認可していたが、大東亜戦争の勃発により頓挫。1952(昭和27)年から福岡県、1955(昭和30)年からは建設省が洞海湾への架橋計画の現地調査を進め、1958(昭和33)年に日本道路公団が架橋事業に着手。1962(昭和37)年に完成した。総事業費は15億円。東洋一の長さを誇る橋の建設は、土木技術者に大きな自信と勇気を与えた。後の関門橋や本州四国連絡橋、レインボーブリッジ、明石海峡大橋などの「長大つり橋」建設のお手本となり、日本の長大吊橋の先駆けと称された。2022(令和4)年に国の重要文化財(建造物)に指定されている。



若戸大橋は完成から62年経つ。過去6回、古い塗装の上に重ね塗る方法で維持管理されてきた。塗膜の厚みが増すと表面のひび割れや剥離が生じやすくなる。このため今回は塗膜を全てはがして再塗装することで、さらに30年程度維持できると見込む。2023(令和5)年度から10年の歳月を掛けて90億円の予算で塗り替え工事が予定されている。戸畑側橋脚に足場が組まれていた。



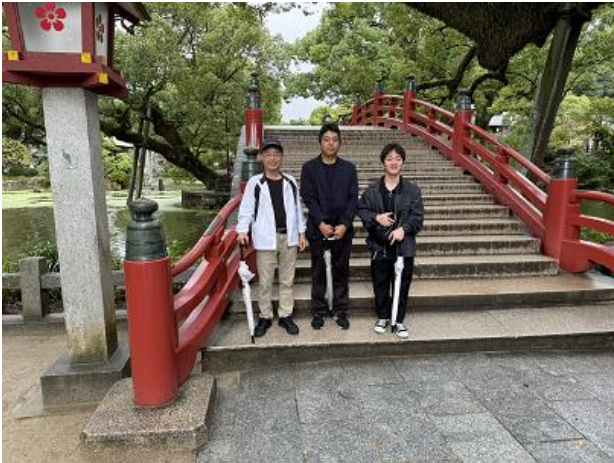
夕食会場は、ホテルの近くの「幡多もつ鍋いっとう家」。飲み放題付きであったが、生ビール、日本酒の熱燗はコースに入っていないと断られた。人手不足対策で、手間が極力掛からないようにしているのだろう。

2日目 10月19日(土)

(1)太宰府天満宮



最初の観光地は太宰府天満宮。空はどんより曇っている。ここに来るのは3度目。一礼して大鳥居を潜る。



太宰府天満宮の心字池「しんじいけ」には、太鼓橋「男橋」、平橋、太鼓橋「女橋」の3つの橋が架かっている。この3つの橋は仏教の三世(過去・現在・未来)を表している。



大鳥居側の太鼓橋「男橋」。コンクリートではなく、花崗岩で造られている。



風格の漂う「桜門」の前で記念撮影。



「第一コンサルタンツが日本一になりますように」と絵馬に書いて奉納。



2023(令和5)年5月から124年ぶりの大改修が始まっている。その間の約3年間に参拝する「仮殿」。

参拝客には、台湾、韓国、中国からの団体客が多い。日本人の参拝客は少ない。

(2) 柳川城のお堀遊覧

二番目の観光地は柳川市。天満宮から柳川市に向かう途中で大雨に遭遇したが、みやま市の「みやま道の駅」では青空が見えてきた。天候に恵まれたと喜んでいたらもつかの間、柳川市に入ってくると雨が降り出した。

雨で道路が混雑し 30 分遅れて渡船場に到着。遊覧していると雷が鳴り、土砂降りの雨。カッパを被っていても雨が内部に染みこんできた。

「柳川川下り」と言われていたので、溪流を下るのかと思いきや実際には柳川城のお堀を小舟で遊覧するもの。流れはない。



桁下余裕が少ない橋がいくつかあった。舟に横たわらないと頭が橋桁に当たる。橋桁に取付られたロープが垂れ下がっていた。橋の下では竿で舟を漕げない。船頭がロープを引っ張って舟を進めるため。

当初は、川下り 60 分コースの計画であったが、到着が遅れたため 30 分コースに変更。土砂降りの中の遊覧である。結果よしであった。



昼食は柳川名物の郷土料理「鰻せいろ蒸し」

(3) 「ふくや」の辛子明太子手作り体験



最後の見学場所は、明太子の老舗「ふくや」が経営する「博多の食と文化の博物館」。



辛子明太子の製造工場も見学できた。写真撮影も許可されていた。すべてオープンであった。創業者の方針で、製法特許は一切取っていない。



手作りの辛子明太子作りを体験した。



博物館の壁に張られたパネルに「ふくや」の歴史が記載されていた。河原俊夫(1913-1980年)が一代で築いた店舗である。

1948(昭和23)年、俊夫が35歳の時に中州に「ふくや」を創業。翌年から「明太子」を製造販売する。1965(昭和40)年に大阪の高級キャバレーから突然大口注文があり、大阪の政財界で話題になる。

俊夫は数年かけて開発した辛子明太子製法を取引業者などに惜しみなく教えている。特許取って

他社を排除するどころか特許もとらず、調味液でつける製造方法の基本まで教えたことで、次々と辛子明太子を作る店が増加していった。1975(昭和50)年の山陽新幹線岡山博多間の開通で「辛子明太子」が博多名物として一気に全国へ広まった。

通販事業の先駆けも「ふくや」である。通販事業が続々と福岡から立ち上がり、九州が通販王国とまで呼ばれるようになっていく。

俊夫は生前「儲かっている会社でも、必ずしも世間から尊敬されるとは言えない。経営者のお金の使い方が悪く、自分のため、家族ためといった私利私欲にまみれている場合が多い。人に人格があるように、会社にも社格がある。ふくやは高い社格の会社でなければならない」と語っていたと言われる。

3. あとがき

今回の旅行の参加者は、鉄建ブリッジ(森下伸裕)、インフラマネジメント(元久慎哉、岡田英央)、北村商事(横田譲二)、西和コンサルタント(渡会俊司、都築重成)、第一コンサルタンツ(右城猛、片山直道、乾隼輔)、構営技術コンサルタント(友田一志)、ツノ工業(津野謙五)、ショーボンド建設(三上晃弘)、都市開発コンサルタント(岡林弘憲)、アンプル(西川準二)、テクノブリッジNKE(吹田紗奈恵、グエン・ドゥックチュン)の16名であった。

旅行会社は近畿日本ツーリストで添乗員は野村砂夜(さや)さん、バスのドライバーは高知自動車道で橋梁工事を経験したことがあるという中村さんであった。

若戸大橋展示室(アビュレッド・ブリジウム)では、北九州市戸畑区役所まちづくり整備課若戸大橋管理係長の國武亮氏に丁寧な説明をしていただいた。

皆さんのお陰で有意義で思い出に残る楽しい見学会になった。

2024(令和5)年10月23日